見しは今、江戸にて六七年以來、高きもいやしきも杖をつく、扨又桑の木は養生によしとて、皆人このみければ、木こり爪木をこる者が、深山をわけて是を尋ね、せなかにおひ馬につけて、江戸町へうりに來る、當世のはやり物、よせい道具なれば、とて、若人だちかいとりて、炎天の道のときにも杖をつき給ふ事、誠に人の非世間のをきてをもはゞからざる振舞、云にたえたり、

〔先哲叢談八〕家祖原瑜字公瑤、〇中略嘗遊芳野、賞櫻花、耽戀三日不能去、遂折一枝携去、後制爲杖、終身手之、

〔鵞峯文集十二記〕存身杖記

太田老人贈一杖於鵞峯林叟、其製奇而巧、以斑竹爲幹、纏藤皮結之、塗漆飾之、故幹不可摧、藤堅而不動、其上頭用桑代鳩、以材美而有治肺之性也、可謂奇矣、且虛幹內而容細紫檀於其間、挾鐵鑷於檀首、以小竹團爲鐵、欲屈之則抑左右鑷使檀入幹內、至鐵而止、乃是坐者縋之起立太易、欲伸之則曳鐵使檀出、而揚鑷拄幹、立者攜之運步不難、幹長一尺五寸、檀長一尺四寸餘、內外容受則一握把翫之具、爲舉趾之便、外內引延則蹇難顛蹶之扶、爲安老之衞、可謂巧也、考諸古則以竹製杖者常也、以檀造之者所謂靑檀朱杖是乎、或曰、纏藤皮以堅之者倣弓幹滋藤之製、以鑷子抑揚者取傘柄開疊之式乎、若使陲般之輩見之則豈不歎此奇巧哉、〇下略

〔嬉遊笑覽二中器用〕古き小歌に、ころくといふ有り、糸竹初心集中ころくぶし、ころくついたる竹のつゞ、ころくもとはゑやくはち、なかはふゞ、ころくするは宏よろしゆのふでのぢくころく、〇中略さて彼ころくついたる竹のつゞとは、人の名めかしく作りしが、俑を始めたるにて、實は竹をいふなるべし、布袋竹は杖にするものにて、節の間五六分、又は五六寸あるものなれば、五六といふ也、もと琉球より渡り、西國より東國に移りたれば、生れは西の國といふ、これも昔つゞつくことはやりし時の小歌にて、江戸のことなれば、武藏野に住などいへるか、尺八といひ、筆の軸と云は、か